

往生要集に於ける一心稱念と十念（色 井）

往生要集に於ける一心稱念と十念

色 井 秀 讓

往生要集觀察門の雜略觀中に「若有不堪觀念相好、若依歸命想、或依引接想、或依往生想、應一心稱念。行住坐臥語默作々、常以此念在於胸中、如飢念食如渴追水。或低頭舉手或舉聲稱名。外儀雖異心念常存、念々相續寤寐莫忘。」と一心稱念を出してゐる。法然の畧科簡等に見られる如き考へ方に従へば、この一心稱念は稱名念佛と解せられるのであるが、果してそれが要集の原意を得たものであらうか。右の一心稱念の説明に、低頭舉手舉聲稱名といふ外儀と、常存する所の心念との二要素が取あげられ、又主として善導の觀念法門と摩訶止觀の常行三昧説によつた別時念佛に於て、或は中心的行法たる正念阿彌陀佛に就て「心與聲相續」とし、或は身の開遮、口の説默、意の止觀について「歩々聲々念々唯在阿彌陀佛」と規定してゐて、外的な稱名に對應して心念が考へられており、一心稱念を單なる稱名と解し去り得ないものがある。然らば心念は何を意味するか、これを十念の意義を解明することによつて探ってみよう。

十念は臨終行儀の中に出されてゐる。臨終行儀は行事と觀念の二段からなり、行事中に安樂集の「爲稱彌陀名號願生極樂、聲々相次使成十念。」等の文を引用して、「所言十念雖有多釋、然一心十遍稱念南無阿彌陀佛、謂之十念。此義順經文。餘如下料

簡。」と述へ、この稱念南無阿彌陀佛が安樂集の釋と關連せしめられて十聲稱佛と理解されるのであるが、なほ如下料簡と問題を殘してゐる。下の料簡とは臨終念相に關する問答料簡を指すが、そこに提出されてゐる九個の問題の中初の二に注目させられる。第一は觀經下下品の意義如何の問題である。これについて、阿彌陀佛の總相或は、別相を憶念し觀じて十念を経る間他の念相の難はらざることであると、佛の觀念を以て充たされた時間的念の意味にとる道綽の解釋と「一心稱念南無阿彌陀佛、經此六字之頃、名一念也。」といふ有人の説との二を出してゐる。第二は彌勒所問經の慈、悲等の十念と下下品の十念との關連に關する問題であつて、十聲稱佛に自然に慈、悲等の十を具足して一稱多稱皆往生するとす義寂の説をあげ、又彌勒所問經は平生の、觀經は臨終の十念であるとする迦才の説を出し、而も迦才の説は聖敎の異説については是非を論すべきでないといふ懷感の考へ方と同一であるとしてゐる。

第一の問題に關して出された二説は共に念を時間の意味にとるが、その内容を前者は觀念とし、後者は少くとも外面的な形は稱名とする。源信が後説に従はうとしてゐたことは第二以下が全て十聲稱佛に關してゐることから知られ、従つて一心稱念には稱名を以て念佛とする面が強力であつたことは否めない。然しそれは稱念の稱の意味であつて、念については明示してゐない。この點は第二の問題に於て説明されようとしてゐる。即ち第一の中の有人の説と殆んど同じことが良源の九品往生義の第十八願釋、又長西の念佛本願義所引の義寂の無量壽經述義記に述べられてゐて、有人とは義寂のことと知られるが、第二の彌勒所問經の十念と十聲稱佛との關連の問題について、十聲稱佛に自然に慈、悲等の十念を具足するとす義

寂の説を持来っており、稱念南無阿彌陀佛について源信は義寂に同調しようとしてゐたことが窺はれる。然し全面的に是認したとなし得ないものがある。それは續いて引用する群疑論と迦才淨土論の文である。群疑論は彌勒所問經の十念に基いて觀經の十念は錯でないかといふ疑問を發し、これに對して聖教の是非をあげつらふべきでないといったのであり、淨土論はこの兩經の十念は一は平生他は臨終であつて同一でないとしたのであり、兩論共兩經の十念が同一でないとする點に於て一致する。従つてこの二者の説は義寂と相反するものであるが、これらを共に出す源信の意圖は、觀經十念の内容を彌勒所問經の十念の如き具體的なものを以て解する方法を是としながらも、慈、悲等の十念でなく、それ以外の具體的な十念を以てせんとしてゐたことであつたと考へられる。然らばそのような十念は何であらうか。

臨終行儀觀念の段を見るに、これは臨終時における極樂往生の事以外には何等他事を雜へない純粹な思念の勧誘であるが、その思念の内容として十事を出してゐる。これを要約すれば、1 歸依三寶、2 厭離穢土、3 欣求淨土、4 善根回向、5 發菩提心、6 佛功德の觀念、7 佛相好の觀念、8 佛光明の觀念、9 佛迎接の觀念、10 本願引接の憶念である。この十事は順次思念するべきもので、第十事に至つて欣求淨土の究極に到達する。従つて第九までは第十に至る爲の段階であり、第十が極めて狭い意味の臨終一念である。

この十事の觀念に於て、第二事以下一事の終る毎に南無阿彌陀佛の六字が挿入されてゐることに注意せねばならない。十事の一々は何れも阿彌陀佛に對する救済の願望であり歸命であるが、内的な願望歸命が外儀的には南無阿彌陀佛と表現されることをこの六字の挿

入が示してゐる。これを逆に云へば、南無阿彌陀佛の内容が歸依三寶であり、乃至本願引接の憶念であつて、かくの如き十種の内容が同一の南無阿彌陀佛に伏在せしめられており、南無阿彌陀佛を念ずることには、かかる十事の内容を思念する意義を有する、といふことが、表明されてゐることとなる。従つてここに、彌勒所問經の十念に代つて、かかる十事を以て念の内容となさんとする源信の意圖が汲みとられる。即ち明言されてはゐないが、義寂の如く十聲稱佛の間を以て十念となしながらも、それは單なる稱名でなく、その後右の如き十事の思念が具備されるべきものとしたこと、又それは義寂が慈、悲等の十念が十聲稱佛に自然に具備されるとしたと同様、稱名の間に自然に具足されるとする考への下にあつたことを認めねばならない。かくの如き十事の思念が稱念の念の意味する所である。而して十事の思念は本願引接の思念に統一されるが故に、稱名の背後には、開けば十事となる本願引接の思念が伏在してゐる。かかる稱名が即ち一心稱念である。

然らば何故に稱名が自然に十事を具備するかの點については、往生要集には觸れてゐないが、觀心畧要集に、阿彌陀の三字を空假中の三諦に於て、三諦三身等一切の法門がこの三字に攝在されてゐる、といふ考へが打出されてゐる。これが右の理由を説明する根據の一到に數へられるものと思はれるが、若しかかる考へが要集に潜んでゐたとすれば、名號を稱する時、稱の故にでなく、名號自體の力の故に十事の思念が具備されることとなり、法然門下の名號論に見られるが如きものの萌芽をここに見出し得るのである。